

心が動く

2024.2.13

まず誰もが驚かされるのは話題の多彩さ豊富さだろう。『よく毎日書けますね』『毎日書くことがあるんですか』と言われることは多い。そんなときは、『心が動けば書くようにしています』と答えている」(No.480) —この一文から教えられるのは、この膨大な文章が常に「心が動」いた結果として成っていること、著者が内外の事々を常に自身の心に落として発信しているが故の深さだろう。

校長先生的な上からの視線ではなく、常に自分と言う地平から自省的に語られている所に、何とも言えない居心地よさが生まれている。また学校においてもコロナによる制限が続いている時期の苦勞も語られており、私的観点から教育史に刻まれるべき記録としても大きな意味があると思われる。

どの文章もさすがに国語教師を思わせるが、自身の主張を明確に述べながら、他に対する批判や説教臭さが微塵もなく、そこが作品の心地良さとなっており、どんな世代の読者の心にもさりりと入ってくる。

今回の通信の量はかなりのものとなるが、月日の流れの中で発信された日々の営みや思いこそが、作品の立ち位置と思われる。教育者として、家庭人として、地域人として、そして一個人としての著者像と思想が、全体を通して浮彫にされることで味わいが生まれた作品である。

書籍化については、編集者とよく相談し、1冊の書籍として最適な形にまとめるよう進めていきたい。すでに記事のなかに執筆経験や意図も書かれているので、前書きや後書きも最低限で済ませ、記事自身に語らせた。

身に余る作品講評をいただいた。自分ではよくわかってはいない、自覚できてはいないことが、「こういうことか」とよくわかった。ありがたい。早速、私の担当となった出版社の方に、お礼方々連絡を入れた。出版社としては300ページを指標としているとのことだった。そうするには、1/6に削らなければならないそうである。6号分のうち、採用されるのが1号分、残りの5号分はボツとなる。

極めて困難な作業になることが予想される。著者としては、一つ一つの原稿に思い入れがある。かなり思い切った基準、ものさしが必要となる。できれば、選定作業を人に委ねたい。だが、そういうわけにもいかないだろう。実は、今までいただいた読者の皆様からの反応が、基準、ものさしをつくる参考になると考えている。読者の皆様、もうしばらくお付き合いください。